

図 1. 2011 年度各年齢層患者一人あたりの抗リウマチ薬の平均年間費用 (円/人/年)

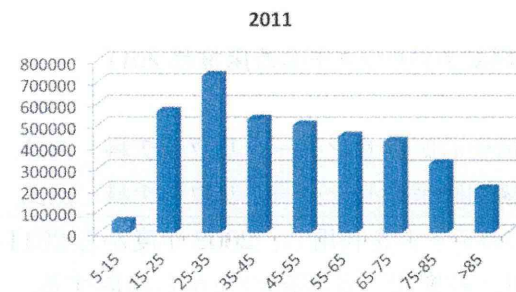
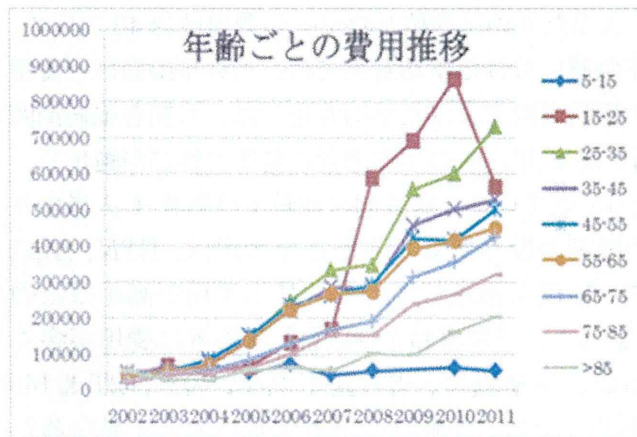


図 2. 各年齢層患者一人あたりの抗リウマチ薬の平均年間費用の推移 (円/人/年)



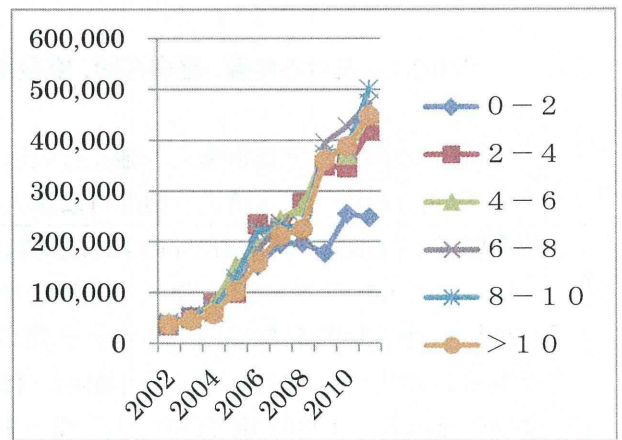
<<罹病期間別の比較 (図 3, 4) >>

2011 年度における罹病期間で分けた平均費用では、罹病期間 8-10 年が最も高く、2 年未満の早期患者が最も少なかった。その差は 2 倍以上あった。2002 年からの推移をみると、当初各罹病期間でほとんど差がなかったが、2008 年ごろより罹病期間 2 年以内の早期患者の費用のみその伸びが鈍化してきた。

図 3. 2011 年度罹病期間別の患者一人あたりの抗リウマチ薬の平均年間費用 (円/人/年)



図 4. 罹病期間別の患者一人あたりの抗リウマチ薬の平均年間費用の推移 (円/人/年)



<<施設別の比較 (図 5, 6) >>

2011 施設間の比較では患者 1 人当たりの費用は最大約 3 倍の差が認められた。2002 年度からの推移をみると、ほぼ施設毎に費用の伸び率は一定していたが、一部費用が急激に上下動している施設が見受けられた。

図 5. 2011 年度施設別の患者一人あたりの抗リウマチ薬の平均年間費用 (円/人/年)

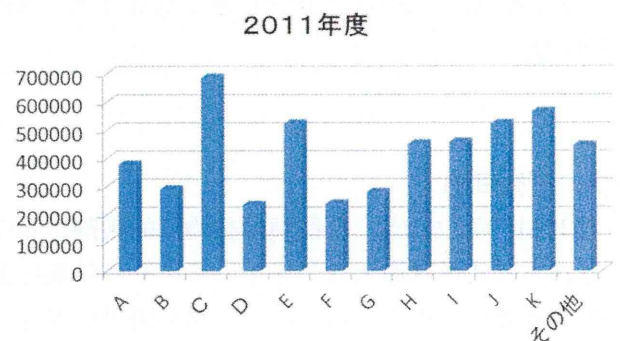
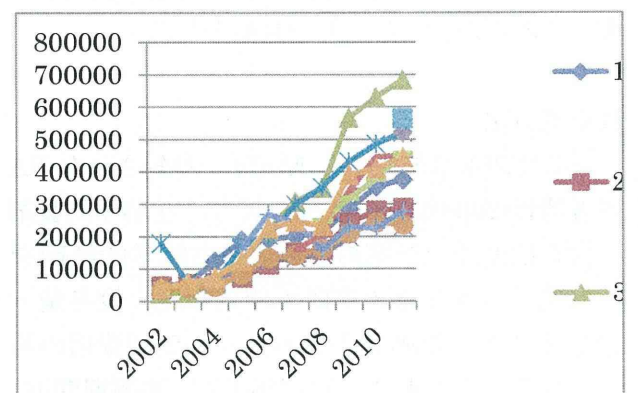


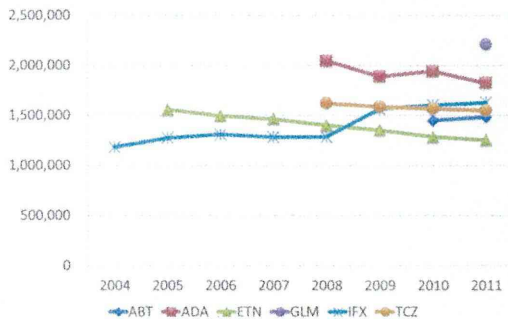
図 6. 施設別の患者一人あたりの抗リウマチ薬の平均年間費用の推移 (円/人/年)



<<生物学的製剤別の比較 (図7)>>

各生物学的各生物学的製剤の投与患者1人あたり費用は、ETN、ADAが年々減少している反面、IFXは2009年に急増し以後も漸増している。最も費用が高かったのはGLMであり、最も少ないETNの約2倍であった。

図7. 各生物学的製剤の投与患者一人あたりの平均年間費用の推移 (円/人/年)



D. 考察

近年の生物学的製剤の普及によりリウマチ治療の費用は増大の一途をたどっており、その適切な配分は重要な問題である。今回我々は4つの側面から費用分配を検討した。

【年齢層】「若年層に多くの費用が使われていた。」リウマチは個人に機能的障害をもたらし、ひいては労働力の低下および障害の保障による社会的な経済的損失をもたらす疾患である。特に若年層における機能的障害は労働力の低下および障害の保障も大きく、社会にとって大きな負担となる。したがって、若年者に多くの費用を投じその障害を抑制することは、今後の経済的損失を抑えるという点で理にかなっている。

【罹病期間】「早期患者への分配が横ばいとなり、2011年には他の罹病期間層の半分程度となっていた。」早期患者への分配が横ばいになった事は感度が高い診断基準への改訂による早期軽症リウマチの増加、T2Tによるメトトレキサート早期導入などの影響があると思われる。実際、早期リウマチ患者へのメトトレキサートの投与量は他罹病期間のそれよりもここ数年で急激に増えてきている(図は示さないがJCR2013で発表)。また、進行例に対する生物学的製剤の中止が困難なため生物学的製剤投与患者が蓄積する事が、罹病

期間2年以上の層の費用が伸び続けていることの原因の一つであろう。しかし、経済的には不合理であり、今後の早期RAに対するT2Tの浸透による早期寛解の達成やバイオフリーにより、罹病期間2年以上患者の費用の伸びが鈍化する事が望まれる。

【施設間】「年間平均費用に2・3倍の差が認められた」原因として各施設の規模により患者背景が大きく違うことが考えられる(片山らの別報告)。そのため、治療法に差が生じその費用も大きな差となったと思われる。年毎の推移でみると費用の増加の仕方は各施設で一定している事はこの患者背景を反映していると思われる。しかし、その伸びが大きく変動している施設では施設の治療方針に大きな変動があった可能性がある。いずれにしても施設間の比較は難しく更なる検討の必要がある。

【生物学的製剤間差】「各生物学的製剤において、実際の投与量で計算した投与患者1人当たりの費用に2倍近くの差を認めた」発売当初生物学的製剤は標準治療では同等の薬価である。しかし、投与方法の柔軟性が認められ、実際には当初の標準治療とは異なる投与方法が増えてきている(松井らの別報告)。そのため、各薬剤投与患者1人当たりの費用に差が認められた。その差が2倍に近づいていることは現在の薬価の妥当性について一考を促す問題と思われる。

E. 結論

抗リウマチ薬の費用分配について、年齢層、罹病期間、施設、生物学的製剤間差の4つの面から検討した。罹病期間、製剤間差の面では問題があり、今後経過を追っていく必要がある。

F. 健康危険情報 なし

G. 研究発表

【学会発表】

- 1) *Ninja* における RA 臨床的寛解例の治療状況およびその経年的変化 宇都宮 勇人、末永康夫、当間 重人 第56回日本リウマチ学会 2012年4月26日(東京)

H. 知的財産権の出題・登録

